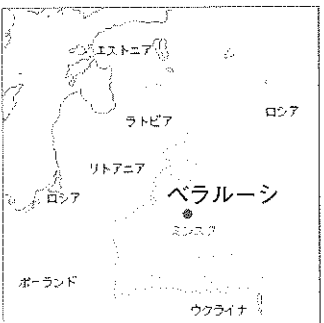


我が国の「武道文化普及活動」の一環として銃剣道・短剣道の教育を行った際の記録をまとめたものです。警察学校での教育の際には、ルカシエンコ大統領が視察に来られるなど、大歓迎を受けました。



ベラルーシの位置

剣士、ベラルーシ 共和国に行く

兼坂 弘道 陸自55

編集委・本稿は2010年に元防大銃剣道教官の兼坂弘道氏が、ベラルーシ共和国内務省の管轄にある「東洋伝統文化協会（葉隠）」の招きで、

ベラルーシ共和国の概要ですが、1991年、ソ連邦の解体に伴い、ベラルーシ共和国として独立しました。面積は20万7600平方キロメートル（我が国の約半分）で人口は約926万人（2022年1月）です。首都はミンスクで、民族はベラルーシ人（84・9%）、ロシア人（7・5%）、ポーランド人（3・1%）、ウクライナ人（1・7%）から構成されています。公用語はベラルーシ語とロシア語、宗教はロシア正教（84%）、カトリック（7%）です。（外務省HP参照）

ロシア・ウクライナ戦争が続く中、ベラルーシ共和国は政治的に難しい立場に立たされていますが、兼坂氏が体験されたベラルーシの人々の日本に対する思いの一端を感じとっていただければと思います。

はじめに

2010年(平成22)、外務省から、「ベラルーシ共和国の内務省から、我が国の武道を紹介してほしいとの要請があった。現地で、銃剣道、短剣道を紹介できないか」という連絡が入った。

突然の話で準備にかかる時間がなかったが、東欧圏の国民に日本の武道の何たるかを知っていただく良い機会であり、二つ返事で引き受けることにした。私のほか、助教として銃剣道の猛者4名が同道した。

現地では、ベラルーシの「東洋伝統文化協会(葉隠)」の理事長スヴァトスラフ・ガエフスキー氏が我々一行を接遇することになっていた。ガエフスキー氏は、日本文化に対する造詣が深く、空手道5段の有段者である。しかも奥様は日本人の花田さんという駐ベラルーシ大使館の通訳

をしている方で、安心して現地へ向

かうことができた。

(スヴァトスラフ・ガエフスキー氏は、我が国との友好親善活動が評価され、2016年に外務大臣表彰を受彰している)

出発から到着

3月7日、12時5分のオーストリア航空52便で成田を発ち、まずウィーン空港に向かった。隣席のご夫婦は日本人で、アウシュビッツ収容所跡の見学に行かれるそう。物好きな人もいるなど思っていたら、奥様から「あなたがたはどちらに？」と聞かれたので、「ベラルーシに武道を教えに行きます」と答えたら、「エッ？」と言ったきり、そのまま黙ってしまった。

成田からウィーンまでは14時間のフライトで、椅子に座りっぱなしはかなり苦痛だった。しかも、スチュワーデスが通路を通るたびに、大きなお尻が私の肘に当たるので、仮眠もできなかった。

待合室で約3時間待機し、同じ飛行機でベラルーシの首都ミンスク空港に向かった。今度は2時間のフライトだ。現地時間の7日22時45分、ミンスク

空港に着いた。木銃や防具が無事に届いているのか不安だったが、きちんと届いていた。

夜遅くにもかかわらず、空港ではガエフスキー氏と奥さんの花田さんが出迎えてくれ、とても心強く感じた。空港から宿泊先のユミレイナヤホテルまでは車で1時間。とにかくベラルーシはだだっ広い国で、平原と湖が広がっていた。

ホテルには夜遅く着いたが、フロントの女性のサービス精神がまったくもってなっとらん！ 渡された部屋のキーは、ドライバーの柄のような握りが付いていてムードのないこと甚だしい。それでもご愛嬌で、「スパシーバ」と言うと、ニッコリ微笑んだ。

貨物列車のようなエレベーターに乗り、部屋に向かった。バスタブがないのでシャワーで疲れを癒し、早々にベッドに潜り込む。24時ごろ電話がけたたましく鳴り受話器を取ると、「○○・マツサージ・クダー？」

ときたので、「ニナーダ(いらない)」で終わり。ゆっくり寝ることができた。やはり疲れていたのだろう。「スパコイノイ・ノーチ(おやすみなさい)」だ。三ツ星のホテルだが、日

本ではビジネスホテルの中クラスか。テレビはサムスン製で、韓国の経済進出の凄さを感じた。

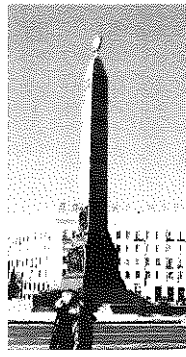
市内見学

今日は3月8日、月曜日。この日はベラルーシでも婦人の日となっている、男性が家事その他ショッピングまでサービスに努めるらしい。当然、銃剣道の指導はできない。したがって、午前中は仲間内で明日からの銃剣道の展示要領の打ち合わせを行い、午後はミンスク市内を見学した。

ミンスク市の中心は駅前で、別名「レーニン広場」とも呼ばれている。国内各地のレーニン像はほぼ倒され、残っているのはここだけらしい。

ミンスクで有名なのはカトリックの「聖シモン・聖エレナ教会」で、市民から「赤レンガ」教会として親しまれている。教会の脇には長崎市から贈られた「平和の鐘」が建てられている。周囲には市庁舎、大統領府、ミンスク大学、駅舎が整然と並んでいる。駅前広場の地下は円形のショッピングセンターになっている。どの店もサービス精神が皆無で、ご愛想も良くない。民族性だろうか。

駅前通りを少し歩くと、勝利公園がある。中心には第二次世界大戦のドイツに対する勝利を称える記念塔や英雄都市記念碑がある。記念塔の土台には戦争の場面のレリーフと永遠の火が灯されていた。記念塔の背後には巨大なKGB本部の建物があり、さすがは旧ソ連邦だと感じた。メイン道路は除雪してあるが、建物の周りは雪の塊が残っており、駐車場探しが大変だった。



戦勝記念塔

若い女性は、テニスのシヤラポワ風の美人が多く、颯爽と歩いていて見えてほればれた。ほとんどの女性が毛皮のコートを着ており、毛皮の本場の国だと感心した。

市内の公共交通手段はトロリーバスで、自家用車はベンツ、フォルクスワーゲン、トヨタが多く、ロシア製の旧式の車は野ざらし状態でほとんど使われていないようだった。

在ベラルーシ日本大使館訪問

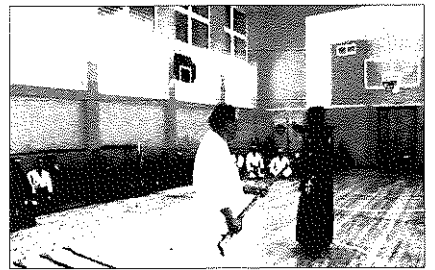
銃剣道・短剣道の指導に先立ち、在ベラルーシ日本大使館の臨時大使松崎潔氏を表敬訪問した。話題は政治、文化、日本との交流など幅広い分野に及んだ。

ベラルーシのルカシエンコ大統領は、政治的にはやや独裁的な傾向があり、社会主義的な考えの強い指導者らしい。外交では、ロシアに対してはやや対抗的で、米国との交流を望んでいるとのことだった。日本との交流にも期待を寄せており、最近になって葉隠会という組織が立ち上がり、日本の柔道、杖道、居合道、剣道などの普及を図っているらしい。30分の表敬予定だったが、話が盛り上がり、1時間半にも及んだ。松崎氏には帰国前夜のお別れ会にも参加していただいた。

銃剣道・短剣道の普及指導

最初に、ベラルーシ国立大学を訪問した。銃剣道の展示に先立ち、同大学の体育部長であるアレキサンダー大尉等と懇談したが、同氏は今後、日本の武道の導入を是非実現したいと熱く語っていた。

懇談後、約1500人の観客の前で、銃剣道と短剣道の型を展示した。



銃剣道の展示

我々の迫力のある動作に対し、見学者から賞賛のため息が聞こえた。

地元のテレビ局も取材に来ており、銃剣道についての質問があったので、応答した。

「あなたは何故白い稽古着を着ているのか」

「貴国ベラルーシのベラは、『白』を意味していると聞いたので、敬意を表する意味で白い稽古着にした」

「銃剣道で軍国主義に戻ることはないのか」

「絶対にない。銃剣道は日本古来の武道である槍術を基本にして、突き技で勝負する武道である。決して戦闘技術を想定したものではない」

「武道とは何か。その意味はどうい

うことか」

「日本の武道は武士道精神を根本に置いている。すなわち、誠実・礼節・勇気・信義及び質素で華美にならない精神と、突き技のスピードとこれに対する反応能力を養う競技である」

「信義とはどういうことか」

「簡単に言えば、相手を尊重して裏切らず、嘘をつかないことである」

「短剣道は警察の捕縛活動に活用できないか」

「短剣道は非常に近い間合いで試合をするので、逮捕術等に活用できる面があるが、安全性を考えて短剣道試合の有効打撃部位を決めている。相手の動きを制するための用法はいくらでもある」



熱心に受講する国立大の学生

「有難うございました（スパシーバ）」
夕方には第135学校の体育館で、銃剣道、短剣道の実技指導を行った。日本から送った木銃は6本、短竹刀は4本だったので、杖道の杖や剣道の竹刀を活用して基本練習を行った。

突き技の筋肉の動き、打ち技の肩の動きを教えるため、私は上半身裸で技を展示したが、上半身裸で教えた人は今までにはないらしく、驚くとともに彼らも真剣に指導を受けてくれた。

助教の4名も熱心に指導に当たり、約40名の参加者は感心し、稽古にも熱が入った。惜しむらくは木銃・短剣の絶対数が足りないことであり、輸送料もかかるので、もし今後もある機会があれば、現地で代替品を作ってもらうことも考えたい。

国立大学の学生も参加していたが、総じて真面目で、動作も真剣だった。こちらが真剣に、時にユーモアを交えて教えれば、相手もこれに応えて真剣に取り組む態度を見せるのは、どの国も同じである。

次に訪問したのは警察学校（ポリスアカデミー）だった。

最初、応接室で副校長、教育部長

等と懇談を行い、銃剣道と短剣道の特色等について意見交換を行った。ベラルーシの警察は、銃剣道と短剣道の犯人逮捕への活用について興味を持ったようだった。

懇談後、実技指導を行った。会場がレスリング道場で、床がマットレスのため足さばきがやりにくく、少し苦労した。

ポリスアカデミーの体格のいい格闘教官が私に短剣道の試合を申し込んできたので、相手をした。私に襲い掛かってきたところ、それを素早くかわすと、大男はもんどりうってマットに沈んだ。会場は拍手喝采で大いに沸いたが、大男が「何で倒されたのか」と質問してくるので、「武道には足さばきが大切だ」と説明したが、分かったような分からないような顔つきをしていた。

その後、助教をもって短剣道での相手への攻め方、倒し方、短剣の用法、足さばきを丁寧に教育した。試合を想定した練習として、突き流し、足さばきについては反復して練習したが、習う側も真剣で、あつという間に時間が経った。練習参加者も相当疲れているはずだが、まだまだ教えてほしいという顔をしていた。

彼らは、銃剣道は兵隊がやる、俺たち警察は短剣道をやるべきだと考えているようだった。

教育が佳境に入っているとき、警察学校長の案内でルカシエンコ大統領が視察に訪れた。大統領は真剣に見学され、満足されたように何度も頷かれ、私に握手を求めてきた。

別れ際に、大統領が被っていたポリスアカデミーの略帽をプレゼントしてくれたので、有難く頂戴した。「今度来るときにこの帽子を被ってくると、空港の税関はフリーパスだ」と冗談を言っていた。

私には、ルカシエンコ大統領は大変気さくな人柄に感じたが、軍部や警察関係者は、ものすごくワンマンでいつも対応に苦労しているとこぼしていた。

ウクライナ戦争が始まってから、テレビでルカシエンコ大統領をよく見かけるようになった。当時は頭髪がふさふさしていたが、あれから12年経ち、苦労続きのためか、髪がだいぶ薄くなったようだ。

警察学校でも地元テレビのインタビューを受け、私の年齢を聞いたので「80歳です」と言うのと吃驚していた。それもそのはずで、当時、ベラ

ルーシ人の平均年齢は男性55歳、女性65歳で、80歳代はほとんどが養老院行きで、驚くのも当たり前である。

短命の主たる原因は、スラブ人の体質や食生活にあるようだ。ウオツカを飲んでボルシチやチーズ、ペーコン、カルパスばかり食べていると、老化も早くなるのだらう。

訓練展示等の終了後、練習に参加した武道愛好者らと懇談会を行った。彼らは、銃剣道と短剣道を継続的に指導してもらいたいと希望していた。

国家保安警察も銃剣道と短剣道を職務に活用したいと申し入れてきた。今回、我々は文部科学省の文化交流事業の一環として来ており、これらの要望については帰国後に提出した成果報告の中に記述しておいた。

また、警察学校の訓練展示の際に、化粧品会社の社長以下数名が、我々が展示している様子を熱心に見学していた。なぜ見学に来ていたのか、その理由は聞かなかつたが、我々に対して誠実な関心を寄せている態度には、大いに親しみを感じた。

博物館見学、工場研修

訓練展示の合間に、交流事業の一環で大祖国戦争博物館を見学した。

ベラルーシの歴史は複雑だが、大雑把に述べると、9世紀ごろルーシ人を主体とするポロツク共和国が現在のベラルーシの地に成立した。その後、リトアニア、ポーランド、ロシア、ドイツ等の支配を受け、第2次世界大戦後に全域がソ連邦を構成する共和国となった。1990年、ソ連邦の崩壊で、翌1991年に独立が承認され国名を白ロシアからベラルーシ共和国とした。

ベラルーシは、第2次世界大戦における独ソ戦の激戦地で、一時ドイツに占領された。国民の約3人に一人、300万人が亡くなったと言われている。



マキシム重機関銃を操作する筆者

大祖国戦争博物館には、ミンスクが第2次世界大戦時にドイツの侵

攻・占領と最後のソ連の反攻で瓦礫の山と化したのが、独立後に見事に復活した記録が展示されている。また、第2次世界大戦時に使用された戦車や爆撃機が整然と展示されている。特に、ナチスによるユダヤ人やパルチザンに対する処刑場面の展示は壮絶で、凄惨を極めていた。

また、ミンスクから車で50^{キロ}ほどの郊外にあるウオツカ工場にも案内していただいた。最近では、ウオツカも洗練されて飲みやすくなっており、「鷹の爪入り」や「女性向き」などいろいろな種類のものを作っていた。工場の施設はオートメーション化が進んでいたが、その設備のほとんどが東芝製だと説明を受けた。ウオツカ工場の社長は元ソ連海軍の軍人で、長男はベラルーシ陸軍大尉、次男は同中尉で、三男は会社のコンピュータ担当として父親の社長を支えていた。

社長は、「日本は千島列島を取り戻すべきだ」と熱弁を振るっていた。社長夫人は自転車競技の元チャンピオンだったそうで、美人でスタイルも良く、ミンスクでよく見かけた「メタボリ婆さん」ではなかった。

おわりに
私は15歳のころ、満洲にいてソ連軍の侵攻を受けた（その時の記録は令和3年「偕行」8・9・10月号の「学生逃げ歩き記」に記載）。その時、私を可愛がってくれたソ連軍の大尉が、私にロシア語をいろいろと教えてくれた。それから60年が経ち、すっかり忘れてしまったが、今回のベラルーシ共和国で咄嗟の場合、思わずロシア語が出たということは、まさに「雀百まで踊り忘れず」であり、不思議なものだと思った。

しかし、私のロシア語は耳で覚えたもので、そこに落とし穴があった。例えば、軍隊調に「座れ」は「サジーズ」、「立て」は「スターチ」である。それを最初の教育で使用したところ、世話人のスヴァトスラフ・ガエフスキー氏が「兼坂先生は全て命令口調のロシア語を使うが、もう少し柔らかく話してください。座れ（サジーズ）とか立て（スターチ）の前に、どうぞ（パジャールスタ）をつける丁寧になりますよ」と助言してくれた。

早速、助言どおりにすると、訓練展示や教育の雰囲気は格段に和やか

になった。武道にしる、言葉にしる、やはり基本が大切だということに染みて感じた次第である。帰国に際し、日本から持参した木銃6本と短竹刀4本は現地の葉隠会に預かってもらい、練習に使ってもらうことにした。

帰りもウイーン経由で帰国したが、黄海上空で夜明けとなり、日本列島から昇る黄金の太陽は見応えがあった。

最後に失敗談。私は、稽古着の下はパンツしかはかないが、ベラルーシの寒さに備え、パンツの上にごっそりホカロンを貼って稽古をした。これを6日間もやったので、低温火傷を起こし、帰国後1週間も通院するはめになった。馴染みの医者にも「兼坂さんは体育の先生だろ。ホカロンはさらしにでも巻いて貼るもんだよ。年寄りの冷や水とはそんなもんだよ」とこっぴどく言われてしまった。今後は、健康管理と身体管理に気を付けたい。もう三途の河がそこまで来ているのだから！

訓練展示や教育の雰囲気は格段に和やか